

Title	『中国図書』 木山書評に答え 併せて若干の問題について
Sub Title	Reply to Prof. Kiyama and on some problems
Author	長堀, 祐造(Nagahori, Yuzo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.6 (2013.) ,p.149(14)- 162(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20130331-0162

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『中国図書』 木山書評に答え 併せて若干の問題について

長 堀 祐 造

内山書店『中国図書』2012年3～4月号に拙著『魯迅とトロツキー——中国における『文学と革命』』（平凡社2011年9月）に対する木山英雄氏の長大な書評が連載された。書評冒頭で氏が言う通り、この書評は数少なくなった魯迅研究に従う現役先行世代の感想を聞きたいという著者の依頼を氏が快く引き受けてくれたものであり、ここでは著者の駁論は適当ではあるまい。提起された大問題については、むしろ本書中で触れた以上のものはないといった方がいい。また、この長大な書評はすでに「木山作品」＝批評であって、それこそ独立した木山魯迅の論考として読まれるべきであろう。

とはいうものの、具体的に指摘された疑問については、答えられる範囲で考えを記し、当面の責めを塞ぐのが著者の義務というものであろう。以下は、言わば木山氏の宿題に対する答えの一部である。

1. 魯迅「中山先生逝世后一周年」の翻訳問題について

■『中国図書』書評前編（3月号）p.4 第二～三段。本書『魯迅とトロツキー』31頁、34頁に対応。

为什么呢？托洛斯基曾经说明过什么是革命艺术。是：即使主题不谈

革命、而有从革命所发生的新事物藏在里面的意识一贯着者是；否则，即使以革命为主题，也不是革命艺术。

この太字の部分を評者木山氏は、本書『鲁迅とトロツキー』が本文中で採用した学研版『鲁迅全集』の日本語訳が誤訳であると指摘し、評者自身の訳を提示している。両者は以下のごとくである。

「革命によって生じた新しい事物が内部意識として一貫しているもの」
(本書訳、学研版『鲁迅全集』に拠る)

「革命によって生じた新しい事物がその内につまった意識の持続する者」
(木山訳)

まずは純粋に翻訳の問題として。本書でも述べたように、ここで鲁迅はトロツキーの二種の革命芸術に関する定義を引いて孫文の「革命者」たることを証明しようとしているのであって、「革命者」を直接定義しようとしているわけではない。木山訳の「意識の持続する者」の「者」が人を指しているとするれば訳としては間違いである。この鲁迅の原文テキストの「者」は文脈からしてどう考えても「人」ではなく「革命芸術」ととるほかない。木山訳の「者」が人ではなく「もの」＝革命芸術を指すとするなら「革命芸術」＝作品の定義として「意識の持続するもの（者）」という訳は些か苦しいが、通らなくはない。しかし、だとすれば学研版訳と木山訳の日本語としての意味の相違はほぼなくなる（その場合「持続」よりも「一貫」という「硬訳」の方が適訳であろう）。

本書の繰り返しになるが、この部分で鲁迅は、本書33頁で引いた茂森訳『文学と革命』日本語訳テキスト棒線部①の「革命から生れた新しいものによって裏付けられた意識に貫かれている作品」を引こうとしているわけで、鲁迅による（翻訳でなく）言い換え、概括の可能性があるとすると鲁迅の日文解釈が間違いでない限り、茂森訳と学研版

訳を比較すれば、学研版訳の「意識」が「誤訳」だ、とは言えないだろう。また魯迅がこの程度の日本語を間違えて訳したり、解釈したりすることはまずないだろうから、茂森訳のこの部分を魯迅の真意と考えて翻訳の参考にするのは当然であり、学研版の訳文もその意味で十分許容範囲内である。学研版の訳はそれほど「意識」であるわけでもないし、誤訳でもないというのが結論である。したがって誤訳云々に依拠した拙論批判に限ってはその批判は無効であろう。

因みに英訳はこの部分は以下の通り（魯迅の英訳購入は1927年9月、1926年段階ではまだ持っていないので、ここでは茂森訳との単なる比較参考資料である）。

When one speaks of revolutionary art, two kinds of artistic phenomena are meant : the works whose themes reflect the Revolution, and **the works which are not connected with the Revolution in theme, but are thoroughly imbued with it, and are colored by the new consciousness arising out of the Revolution.**

(*Literature and Revolution*, tr. by Rose Strunsky, London Allen & Unwin LTD. 1925, p. 228)

と言うわけで、ことさら「内部意識」という訳語にとらわれて著者の論が停滞しているとの評者の指摘は当たらないし、この訳語が著者の行論上において、好都合だとか不都合だとかいう問題は存在しない。

評者の言うように著者の議論が「不徹底で」歯切れが悪いとすれば、別の要因である。著者の政治的立場は本書『魯迅とトロツキー』を読めば隠しようのないものだが、この魯迅とトロツキーという問題は魯迅論としては重要な観点であり、これを短絡的に政治的・党派的発想で矮小化されたら、テーマとして不幸である。そこで記述は実証を旨とし、その範囲を超えないように禁欲的たらざるを得なかったのである（本書「終わりに」参照）。その点で逆に、トロツキーやトロツキ

一派に「有利」な「事実」に対する吟味は厳しくなるという反作用もあったかもしれない。これも評者をいらだたせる「不徹底」の一因であろう。著者自身ですら今からこの時期の拙論を見ると、評者の心情は十分理解できる。しかし、本書凡例で書いたとおり、25年前の論文はすでにある意味で歴史文献でもあり、新資料ですべて書き直すことは不可能でもあると同時に、むしろそのままの方が歴史的眺望もいはずだと著者は考えた。第一部、特にその前半は初出から長時間を経ており、これも凡例で述べたとおり、できる限り原型を保つこととしたので、著者の行論も「不徹底」のままとせざるを得なかったし、それを隠したり、改めたりするつもりもなかったのである。

その上、この訳の部分は「革命人」の典拠確定の論理的前提部分であり、直すとなるとそれなりの手続きが必要となるが、本書刊行に当たり検討した結果、翻訳にそこまでの問題性はないものとしてそのままとしたのだと思う（本書この部分は、2009～2010年に改訂確認作業を行っており、記憶が些か薄れてはいるが、茂森訳と学研版訳とは改めて対照し、ここは特に問題なしとしたはずである）。本書全体の論理的前提となるこの部分では、我田引水を避けるためにも他者訳に頼ったのは選択としては悪くなかったはずだ。

初稿から四半世紀、魯迅とトロツキー問題は大陸の一般研究者レベルでもほぼ常識的テーマになってきている。今日なら書き方も違ってくるだろうが、逆に今日の状況を可能にしたのは、著者のような「不徹底」な書きぶりの「実証的方法」だったとも言えると考えている（これも「あとがき」参照）。

竹内魯迅に対してであれ、丸山魯迅に対してであれ、トロツキー的観点を正面からとりいれ、これら旧来の魯迅像を見直すという作業は、四半世紀前の日本の中国文学者は誰もやっていなかったと思う（その外側にはいたように思うが）。著者の想定では数人の潜在的な有資格者はいたが。そういう意味では著者の行論の「不徹底」ぶりも含めてもいいが、トロツキーにはみな腰が引けていたということである。毛

沢東の「鬼」のなせる業だ。

なお、「掣肘」云々の翻訳はまったく著者の間違い。本紀要前号の拙論「魯迅と胡愈之」の末尾に正誤表を載せているので参照頂ければ幸いである。また、本書刊行に当たり、魯迅テキスト、その他テキストの引用は再度原文と訳文とを校合したつもりではあるが、なお完全とは言いきれない。「あとがき」で読者の批正を請うた所以である。

いささか長くなったが、前提が崩れると本書全体の信頼性が揺らぎかねないので、敢えて書いておく次第である。もう一点付け加えると、魯迅も「翻訳に関する通信」（『二心集』）で言及している梁啓超の著になる『和文漢読法』を、この部分の茂森訳日本語テキストに適用すると、魯迅の中国語訳にはほぼそのまま置き換わると言う指摘を日吉の同僚の種村和史教授（中国古典文学）から頂いた。「翻訳に関する通信」では、魯迅は瞿秋白に同調してか『和文漢読法』は時代遅れと振り棄てている印象だが、魯迅の翻訳テキストの「硬訳」の質を検討する際、梁啓超のこの本を見直す必要があるのかもしれない。これは今後の課題とするほかない⁽¹⁾。

2. 魯迅が「革命人」という語彙をあまり使っていないという指摘について

■ 書評前編 p.5 第一段。

これはそのとおりである。魯迅のこの語の使用例は1925年から1930年の間のこと。1927年の二編「革命時代の文学」と「革命文学」に「革命人」が出てくるのは、1926年7月に『文学と革命』から第3章「アレクサンドル・ブローク」を翻訳した際、この日本語の訳語をそのまま魯迅自身の中国語の訳語として使用した時の印象がまだ強かったということもあろう（「革命者」が出てくる1926年3月執筆の「中山先生逝世後一周年」の時点では魯迅はまだ「アレクサンドル・ブロ

ーク」の章を訳していない)。逆にこれはこの二編の拠って立つ論理がトロツキーの『文学と革命』の議論であることの証左でもある。魯迅独自の発想であるならここは「革命者」でも「革命家」でもいいはずだが、わざわざ「革命人」を使っているのはトロツキー（日本語版『文学と革命』）に拠っているからにはかならず、魯迅革命文学論の特徴的発想がトロツキーに拠ることはここからも明確である。

なお魯迅が「革命人」を用いているのは、以下の諸編。

1. 「フェアプレーは早すぎる」(四) (1925年12月29日付執筆、『墳』所収。魯迅の『文学と革命』購入は1925年8月26日)
2. 「革命時代の文学」(1927年4月8日の講演、『而已集』所収)
3. 「革命文学」(1927年10月21日付発表、『而已集』所収)
4. 『壊滅』「第二部第一～三章の訳者付記」(1930年2月8日付、『訳文序跋集』)

少なくともこの期間は、魯迅に対しトロツキー文芸理論が影響力を保持していたと考えられよう（これは本書の記述と矛盾しない時間的範囲である）。

一方、魯迅にとっては期間限定的なタームであった「革命人」を対概念である「同伴者」とともに、魯迅生涯の規定に使うのはどうかと言う木山氏の批判は理解できるが、これは氏も言う通り、著者は基本的に「同伴者」概念を期間限定的に定義した上で、すでに出来上がった概念としてこの両概念を通時的に使用するという手続きをとったつもりではある。なにぶん、本書の論文群は四半世紀間に書いたもので、この両概念の間で著者の位置（魯迅観）に多少のブレがあるのは確かで、それは改稿中にも気付いていたことではある。なお、本書第1～5章の原型である修士論文（1986年執筆）で念頭にあったのは（記憶は薄れているが、本書を読むとそうとしか思われぬ）、丸山昇著『魯迅と革命文学』だったが、本書第1～3章はこの著にかなり引きずられていたと今から見ると思われる（「革命人」、「同伴者」を丸山氏も魯迅晩年十年ぐらいの期間、魯迅を規定しうる語として使用

しているように思うが。「『同伴者作家』と魯迅」、1962年、参照。『丸山昇遺文集 1』汲古書院、2009年、所収）。丸山氏の当該書における主張は一言で言えば、魯迅の革命文学論は、「原理論」ではなく「状況論」として読めということだったが、トロツキーの「原理論」に忠実な魯迅の革命文学論は単に「状況論」とは読めないことを第1～3章では述べたつもりだ（本書30頁では「『状況論』の論理展開を可能にした魯迅内部の論理構造・発想法という意味での「原理論」を検討する」とした）。本書第1章初出論文発表時（1987年）に丸山氏からお聞きした感想の一つは、「あれは「状況論」「原理論」という言葉が独り歩きしていたので、毒消しにはちょうどいい」というものであった。

3. 「革命人」についてロシア語版を参照するべきという指摘について

■書評前編 p.5 第一段。

魯迅は『文学と革命』のロシア語版を見ていないと思われ（蔵書中にロシア語版『文学と革命』はなく、『魯迅全集』中、ロシア語版への直接的言及もない。ロシア語版書名だけは出てくるが）、ここの行論上はあまり影響しないと考えたが、「革命人」概念が原著由来なのか、それともあくまで特殊日本語版由来であってロシア語版＝トロツキーの原思想とは断絶があるのか、を見ておくことは意味がある。以下、本書50～51頁対照表に掲げた茂森訳「革命人」が出てくる5か所をロシア語版原著第二版（早稲田大学図書館蔵片上伸寄贈本）で対照しておく。

これら原著の用語から見るとトロツキーは一般名詞としての「革命家」と、革命の意識が一貫する（つまり無意識のうちにも革命的な＝革命に裏打ちされた）「革命（的）人（間）」を書き分けていることが

茂森訳	ロシア語原著	原語	長堀訳（ ）内は長堀コメント
p. 115	p. 69 L18	революционеры	革命家
p. 154	p. 89 L17	другие люди	別の人々（люди は человек の複数）、（文脈から新しい革命時代の人のことと考えられる。茂森の「革命人」の訳語は首肯できる）
p. 171	p. 98 L6	революционерами	革命家
p. 310	p. 174 L2-3	революционный человек	革命的人 [間]
p. 46	p. 37 L 20	люди другой эпохи, другого мира, прошлой эпохи, невозвратного мира.	別の時代、別の世界、過去の時代、呼び戻すことのできない世界の人々（ここにも「革命人」にあたる表現はない。「別の時代」、「別の世界」などの表現がある。茂森はそこから新時代の人を連想して「革命人」を用いたのだろう）

わかる。魯迅が「革命時代の文学」「革命文学」で引用した「革命人」概念はトロツキー原著由来で、そこは茂森訳もよく捉えていたと考えられる。魯迅は（この点に関しては）原著に忠実な茂森訳トロツキーの「革命人」概念に依拠していた、と言えるであろう。トロツキー『文学と革命』第3章「アレクサンドル・ブローク」の魯迅による翻訳テキストにある「革命人」も原著 p. 89に対応する。つまり、トロツキーの原語も p. 89、p. 174の二箇所は「特殊」と言えよう。

一方、茂森訳 p. 115、p. 171、p. 46の部分は「革命人」という「訳語」を使う必然性はなく、この三か所は茂森の解釈の結果と言えるだろう。

4. 魯迅と瞿秋白の問題について

■ 書評前編 p.6 第一～三段。

1931年で魯迅のトロツキー引用は終わり、魯迅はトロツキーと距離をとり始める。1930年代の世界の知識人の枠から魯迅も出るものではなかったこと、言い換えれば魯迅が歴史的な拘束を受けていたことは客観的事実であろう。魯迅がトロツキーから距離を置くことになるその過程で瞿秋白が何らかの役割を果たしたのではないかと見るのが著者の推論だが、人格的にこの作用を果たし得たのは瞿秋白をおいていなかったというのが依然として著者の見解である。多くの中共党史や左連研究分野の中国の研究者も多分そう見ていると考えられる。『魯迅研究月刊』は他の拙論は無視して魯迅と瞿秋白に関するこの章の初出論文を1996年第3期に掲載し、1999年、中国近代史研究所・中共広東省委党史研究室主催の中国革命史中青年学術賞はこの拙論に「海外優秀論文賞」を授賞している。魯迅とトロツキーを「分離」するこの論文だけをとれば、中共にとっては痛くも痒くもない、むしろ「好都合」だということもあろうが、一定の妥当性を歴史家たちは見ていたはずである。なお、著名な党史研究家で瞿秋白研究者でもある陳鉄健氏は、柔石の可能性もあったのではないかと著者に直接提起したことがあるが、可能性は否定できないにしても、魯迅から見るとやはり柔石と瞿秋白とでは革命家・翻訳家・文芸批評家としての「キャリア」、「格」が違いただろう。馮雪峰にしても然りである。最近、清華大学中文系の王中忱教授から、この件に関しては中国でも拙論は定説化していると聞いて、うれしい半面、「分離」ばかりが強調されているのかと思うと複雑な心境にもなった。

魯迅とトロツキーの「文学論」での「結合」を「党内闘争問題」で「分離」しようという「戦略」は考えてもみなかったことだがなるほ

どそういう戦略もあったかと思う。トロツキーや中国トロツキー派に「不利」であっても「事実」あるいは「事実に近いと思われること」はありのままに書くことを心掛けたことは確かである。またそうした客観性が他の部分の「実証」をも保証するとの意識があったとすれば、「戦略」と言えないこともない。そこまで気がまわっていたとするなら大したもの、これは褒めすぎである。この辺りのことは1986年に書いており、トロツキーと魯迅や瞿秋白を結び付けて考えている文学研究者はまずいなかったわけで、そんな余裕は到底なかったというのが本当のところだ。

ここでは結局、魯迅にしても瞿秋白にしても、「トロツキー派に答える手紙」のトロツキー、中国トロツキー派中傷に行きつくはずはないと強調したかったというのが、当時の（あったとすればであるが）「戦略」の実態であつたろう。

一言余計なことを言えば、著者としては福本イズムの「分離結合論」はまったく好みではない。むしろ山川イズムの「方向転換論」の方がまだしっくりと来るのだが、これは本論の趣旨から逸れるのでここまでとする。

5. 「書中に引かれてないが、その一方で、陳仲山の「愚かさは」文学的に……「籠絡」のしようがないのだ、とも言っている」の部分について

■書評下編（4月号）p.2 第三段。

この部分は、書評中では鄭超麟の言葉のようにもとれてしまうが、王凡西の『双山回憶録』（邦訳『中国トロツキスト回憶録』）の言。また、「書中に引用していない」とするが、かなり趣旨の近い「声明」を本書211頁に載せている。また、これに付けた注49でもこの「声明」が王凡西の起草になることを注記している。王凡西にブレはない。

「書中に引用していない」ことに特段の「意味」はない。なお、ついでなので、この「声明」に対する王凡西の63年後の言を筆者宛の書信から要約しておく。

『『火花』の特別声明は私の起草である。中国共産主義同盟臨時中央が決議し発表したものだ。これは魯迅に「攻撃を仕掛けた」ものではない。これは私たちが魯迅（実は馮雪峰だったが私たちは当時そのことを知らなかった）の攻撃を受けたことに対する、応戦乃至反撃であった。この「声明」は63年後の今日から見れば、「行きすぎ（原文「過火」）」かもしれないが、当時の中国の、また国際的な環境を考慮すれば、魯迅のあの手紙のために私たちがあのような反撃を行ったのは極めて当然のことであった。陳独秀は当時、魯迅を「赤い走狗」とまで罵って言った。『双山回憶錄 増訂版』234-239頁を参照してほしい。」（1999年3月24日付書信）⁽²⁾

6. 「美事な死に時も得て逝った「同伴者」 [= 魯迅] より、
今にしてもっと救われない幽鬼は、むしろほかに犇
いていそうなものだ」について

■ 書評下編 p. 4 第三段。

「美事な死に時も得て」という言い方は第10章で書いた通り、魯迅漢奸説の論者がよく使うので、著者としてはあまり使いたくないのだが、「今にしてもっと救われない幽鬼は、むしろほかに犇いていそうなものだ」は確かにそのとおりだろう。ただ、魯迅が救われる同一平面上においてしか彼ら「幽鬼」もまた救われないのではないかと著者は考えている。「幽鬼」のうちには言うまでもなく、王実味、蕭軍、胡風ら（魯迅直系のほか、周作人らも入れて）数限りない知識人ばかりはなく、その万倍を数える無意味な死を強いられた無告の民が入れられなければならない。

7. 若干の補足：王凡西の拙論に対する反応

王凡西（1907-2002）とは1997年から通訳が始まり、生前、本書第二部（第7章）までは拙論初出誌あるいはそのコピーを送っている。中国語の翻訳があるものはそれも送っている。王凡西は日本語も読むことはできたはずである。みな目を通してくれて感想も伝えてきた。本書でも記したとおり、第7章などでは直接、資料や情報の提供も受けている。第一部の拙論に関しては「公平」だというのが、王凡西の感想である。通訳開始間もないころの書信で王凡西は「あなたについてはよく知っているわけでないが、これまでのあなたの作品を読む限り、あなたは私たちが理想とする歴史家の一人だ。中国トロツキー史を書くのなら、何でも必要な資料は送る」（1997年12月27日付書信）というような趣旨を書いてくれた。論文数編を読んだだけで著者（長堀）を理想の歴史家だなどと持ちあげているのは、按ずるに、著者の実証的方法こそ王凡西らが必要としていた方法だからである。なぜなら、彼らは自分たちの政治的立場、生き方、生涯における選択の正当性に自信を持っており、ある種の客観主義、実証主義的方法こそ、それをおのずと明らかにしてくれる最良の方法と考えていたのである。これは期せずして著者の認識とも一致するものであった。王凡西はまた別のところではこうも言っている。中共の枠内でもまじめなトロツキー派史を書くためには「トロツキズムに改宗する必要もありません。……ただ、以下のようにしさえすればいいのです。それは、トロツキストの理論と主張を正確に理解し、ありのままに述べる、資料の真偽を十分慎重に鑑定する、さまざまな事件の虚実を細心の注意を払って判断する、ということです」（拙訳『中国トロツキスト史』の著者[唐宝林]に答える、『トロツキー研究』第23号173頁）と。

終わりに

本来はまだまだお答えすべき点もあるが、この辺までとしたい。

さらに、本誌前号掲載の拙著正誤表以外のミスや参考文献の記載漏れなどにも気づいているのだが、いずれ訂正の機会があるほどに本書が生きながらえてくれることを願うばかりである。

木山氏のみならず、多くの方が書評を書いて下さり、著者は様々な不備や、予想外の観点、また同感するところを聞かせて頂いた。最後になるが、一般読者の皆さんはもちろんのこと、木山氏初め、読むだけでも面倒な本書にじっくりお付き合い頂いた書評者のみなさんに深く御礼申し上げたい。

付録 その他書評一覧

- | | |
|---------|---|
| 佐々木力著 | 長堀祐造著『魯迅とトロツキー』 中国における『文学と革命』
『週刊読書人』2011年10月21日付 |
| 牧陽一著 | 「2011年読書アンケート第2回」『中国図書』2012年2月号 |
| 同学文庫の紹介 | 長堀祐造著『魯迅とトロツキー：中国における『文学と革命』』
『早稲田大学中国文学会集報』第三十七輯 2012年3月1日署名(つ) |
| 読書案内 | 長堀祐造著『魯迅とトロツキー』 中国における『文学と革命』
JRCL・NCIW 編『かけはし』第2208号2012年1月30日付 署名(H) |
| 藤井省三著 | 魯迅の政治的利用の全貌を解明する『魯迅とトロツキー』
『東方』374 2012年4月 |
| 矢吹晋著 | 書評 長堀祐造著『魯迅とトロツキー』(平凡社、2011年) |

- 『トロツキー研究』第60号 2012年春・夏合併号
代田智明著 書評 長堀祐造著平凡社『魯迅とトロツキー—中国における『文学と革命』』
『中国研究月報』No. 774 2012年8月号
工藤貴正著 長堀祐造『魯迅とトロツキー—中国における『文学と革命』』
『現代中国学会』第86号 2012年9月

注

- (1) 陳独秀の友人で日本留学生でもあった孫伯醇著『ある中国人の回想』(東京美術、1969年)には20世紀初頭の中国人留学生がこの書によって日本で日本語を学んでいた様子が描かれていて面白い。
178～179頁。
- (2) 『火花』の「特別声明」の起草者については、元中国トロツキー派の中には陳独秀だと考える人もいるそうだが、王凡西の歴史的 position、記憶と誠実さから、この書信の内容に疑問の余地はないと私は考えている。